

月刊

みんぱく

● 国立民族学博物館

2009

4

月号

昭和52年10月5日第1号刊行 ISSN0025-5618
平成21年4月1日発行 第33巻第4号通巻第379号

須藤健一 新館長に聞く

知的パワーに満ちた
次世代研究者の育成が
私の使命



時を超えて感じるピラミデのころ

ひびの かつひこ
日比野 克彦

先

日、ペルーはリマから南下した街、ピチャマにある遺跡へ初のテレビ取材が入るということで、撮影に同行した。考古学者でもその存在を知る人は少ない。

小高い丘があり、頂上からは海が見渡せる。海と山を繋ぐこの地域はどのような思考をもった人々が集まり、どのような動機でピラミデ（ピラミッドのこと）を創造していったのだろうか？

私は人間が感じることは四、五〇〇〇年前と、いや三万年前とだって大して変わっていないと思っている。世界最古の絵画と言われる洞窟壁画のひとつをベッシユメルというフランスとスペインの国境近くの村で見た時のこと、現物の壁画の前に、時を隔てて同じ人間が立っていた。そこに描かれてある動物の絵は、今の私が見てもその気持ちが変わってゆくものであった。その時、人の気持ちは大して変わっていないと確信した。

考古学は発掘をするアウトドアと、その

発掘したものを分析研究するというインドアとに大別される。遺跡の現場では、形をとどめているものが発掘された地点を記録していく。そのかけらから当時の生活ぶり、社会を推測していく。

物を発見するのが目的ではあるが、そのものがそこにある理由や行為が起きたその同じ場所に居るということを感じることが、なによりも大切なんだと思う。

この丘に立っていると実に気持ちいいし、ここにずっといたくなる。そんな空気がここに流れている。山の人が海に憧れて出てきたのだろうか？ 海から来た人が航海の記憶をたどっていたのだろうか？ どこからどこにいくこうとしていたのだろうか？

この遺跡の責任者で、サンマルコス大学、ノルカ教授の研究室生タチアナがわれわれを案内してくれる。

まずは、葦などの植物で編んだ網に石をつめて建物の基礎に使うシクラスというものを見せてくれた。網は石を運ぶのにも便利だし、こうしておくことで免振の効果も

あるという。頑丈で揺るぎないものを目指すのでなく、隙間があるものをつみかさねていくという「間」のある考え方である。植物で出来ているというのに雨の降らないこの地帯では昨日編んだかのように色も鮮やかに姿を現していた。シクラスのデザインは様々で、大きさや用途に応じて編み方を変えているようだ。

エジプトのピラミッドのような数学的に計算された構造物ではなく、緩やかな間を基本としているところがこの特徴である。蟻塚のようにひとあみひとあみの集積が、気がつけば山になっていたのである。何もないところに山は出来ない、なにかそこに気になるものがあつたのだろう。その気になるものとは、そこに来る人々みんなが持っていたものであり、誰かから押し付けられたものではなく、生き物として感じるものだったのだと思う。

それがピラミデという形になっていったのではないだろうか。と丘の上で風に吹かれながら考えたのだ。

1 世界へ●世界から
時を超えて感じるピラミデのころ
日比野 克彦

2 みんぱくインタビュー
須藤健一 新館長に聞く
知的パワーに満ちた次世代研究者の
育成が私の使命

8 モノ・グラフ
国立民族学博物館の
民族学研究アーカイブズ
久保 正敏

10 地球ミュージアム紀行
セントキッツ博物館
自らの誇りを取り戻す博物館
五月女 賢司

11 表紙モノ語り
マルケサス諸島の夕バ
須藤 健一

12 みんぱくインフォメーション

14 万国津々浦々
暮らしを彩る暦
暦の機能と文化
野林 厚志

15 時論 新論 理想論
ガザとピラミッド
古代文明への幻想と現代史
新免 光比呂

16 多文化をささえる人びと
ことばに仕事をあたえる
多言語センター FACIL
庄司 博史

18 生きもの博物誌
バイカル湖のご馳走
伊賀上 菜穂

20 歳時世相編
旧暦三月三日 海に願う無病息災
飯田 卓

22 フィールドで考える
土の中まで変えられない
川口 幸大

24 みんぱくウィークエンド・サロン
研究者と話そう
次号予告・編集後記

1958年、岐阜市に生まれる。東京芸術大学大学院修了。在学中にダンボール作品で注目を浴び、国内外で個展・グループ展を多数開催するほか、舞台美術、パブリックアートなど、多岐にわたる分野で活動中。近年は各地で一般参加者とその地域の特性を生かしたワークショップを多くおこなっている。オフィシャルウェブサイトは「CAFE HIBINO NETWORK」<http://www.hibino.cc>

須藤健一 新館長に聞く

知的パワーに満ちた 次世代研究者の育成が 私の使命

聞き手 久保正敏 (本誌編集長)

四月に就任した須藤健一館長。創設まもない民博に着任して一八年間在籍、神戸大学を経て民博には一六年ぶり。研究者としての歩みと関心事、研究機関としての民博の課題と問題の所在、博物館としての今後など話題と抱負は縦横に

―館長は、民博創設期の一九七五年一〇月にオセアニア研究者として着任され、オセアニア展示に力を注がれました。なぜオセアニアだったのですか。
ひとつは、私が新潟県佐渡に生まれ、島育ちだということ。大学院でもやっぱり、伊豆七島や奄

美などの島の社会や家族、世界観などを調査していました。島というのはいわば完結する世界をつくっていますから、社会の全容を把握・理解しやすいんですね。くわえて、私は家父長家族的なもので育ちましたから、比較という点で身近だったのがミクロネシアの母系社会でした。

万国博世代を受け継いだ 海洋博世代

最初に現在のミクロネシア連邦を訪れたのが一九七四年、私が東京都立大学の博士課程のときでした。かつては日本の本土防衛の軍港で当時はトラック諸島とよんでいたチューク州の島嶼部を中心に、四か月間滞在しました。その後も母系社会を納得のゆくまで調査しようと、ミクロネシアに通いました。母系社会ですから婿入り婚。男の地位の低さ、悲哀を感じさせられましたね(笑)。―男性の研究者には母系社会はなかなか見えにくいことはないのでしょうか。

母系社会では、奥さんから「魚をとりに行ってください」とか「これからタロイモ田に行くからあなたは子守りよ」、なんていちいち言われたり、夫はけっこうコントロールされていますね。ところが、男は自分の生まれた村や母系一族の人たちとどこに行くと、そこではチーフであったりする。姉妹だけでなく、姉妹の旦那さんも気をつかってくれる。母系社会では、男は結婚して婿になると「しもべ」、実家に帰ると「王さま」というふたつの地位を演じることになりました。

「男というのはたいへんですね」と言うと、「須藤さん、馴れればだいじょうぶ、体がそうなっていますから」ってね(笑)。とはいっても、州都



すどうけんいち
須藤健一
国立民族学博物館長

新潟県に生まれる。東京都立大学(現首都大学東京)大学院社会科学部研究科博士課程単位修得退学。文学博士。専攻は社会人類学。著書に『母系社会の構造―サンゴ礁の島々の民族誌』(紀伊国屋書店、1989年)、『文化人類学事典』(丸善、2008年、編集顧問)、『オセアニアの人類学―海外移住・民主化・伝統の政治』(風響社、2008年)などがある。

に出かけて自分の子にお土産を買うときは、自分の姉妹の子どもにも買わなくてはいけない。自分の子だけを可愛がっていると姉妹から、「もう、あなたの助けはしないわよ」と言われる。彼らは、それを天びん棒にたとえて、「婿入り先と生まれた実家とのバランスがだいじ」と。しかし、最近のミクロネシアでは、妻と子どもたちを優先する傾向が強くなっているようです。

そもそもミクロネシアに行くきっかけは、海洋博(沖縄国際海洋博覧会)でした。沖縄の本土復帰を記念して一九七五年に本部町で開かれた国際博覧会です。

一九七〇年の大阪万博(日本万国博覧会)では、仮面を中心に世界各地の民族資料を集集・展示し、その後、梅棹忠夫さんなどが「万博のあとに民博を」と呼びかけて万国博跡地にこの民博を誘致しました。同じように、海洋博でも太平洋の島嶼地域の生活用具や民族資料を集めて、ゆくゆくはオセアニア地域の博物館にしようという計画がもちがりました。



開館間もないオセアニア展示場でのサタワル島の帆走カヌー「チエチエメ二号」

梅棹忠夫さん、大島襄二さん(関西学院大学。当時)、石川榮吉さん(東京都立大学・当時)の三人が中心となって行動されました。若手の研究者や大学院生などを一五人ほど選んで、オセアニアやアジアの島嶼部の各地に送りこむことになり、私はチューク諸島での調査を希望したという経緯があったのです。海洋博で展示する儀礼用の木鉢や暮らしの用具、漁具などを収集するかたわら、民族学的な調査をしてみました。海洋博では、私たちが集めた資料は、政府出展館である海洋文化館に展示されました。これは現在も沖縄の海洋博公園で博物館として機能しています。

「チエチエメ二号」の故郷 サタワル島と出会う

やがて、民博にこないかという恵まれた話があった。七五年一〇月にこの千里にきました。当時は万博記念協会ビルの一画を間借りして、当時の文部省から移管された民族資料をプレハブ倉庫で整理しながら七七年一月の開館にむけての展示品選びが重要な仕事でしたね。

オセアニア展示のチームは石毛直道さん(民博名誉教授)を隊長に、私と石森秀三さん(北海道大学)、秋道智彌さん(総合地球環境学研究所)の三人でした。大海原をカヌーで航海して太平洋の島々に移住し、その海に暮らす人びとを象徴する展示には帆走カヌーが欠かせないと、海洋博の会期中にミクロネシアの島から沖縄までほぼ三〇〇キロメートルの航海をなしとげたチエチエメ二号も譲り受けました。これを入り口近くに置いて、その周辺に漁具、衣服、住居などの暮らしの世界、さらには交換品などの価値の世界と、

仮面など儀礼世界の展示を構想しました。この展示は大きな変更もなく、現在にいたっています。

民博がオープンしたころ、オーストラリアやハワイなどの大学で、近代的な航海器具を使わない航海術が注目を浴びていました。ミクロネシア連邦のヤップ州の最東端の離島サタワル島はチューク州の最西端にも近いのですが、太平洋地域でもっとも伝統的な航海術を残している社会のひとつです。三か月に一度くらいしか連絡船がこないから、帆走カヌーと航海術がないと、無人島での漁撈、他島への親戚訪問や交易航海もできない。

八〇〇キロ、一〇〇〇キロを帆走カヌーで航海する伝統的航海術を支えている人びとを調査しようとして、サタワル島に石森さんと二人で一九七八年に四か月をかけて予備調査に行きました。次の年には秋道さんにも加わってもらって本格調査。サタワル島は一周六キロ、人口約五〇〇の小さな島で、三人で調査する規模ではないのですが、生業と自然環境は秋道、社会・経済は須藤、宗教・儀礼は石森と分担を決めて総合的に調査しました。

―サタワル三人組と言われましたね。

そうでした(笑)。島の人たちへの恩返しの意味もあって、「サタワル語―英語辞典」をつくらうと、島での調査助手に民博にきてもらい、一年半くらいをかけて辞書づくりをはじめました。それから三〇年ちかかたって、オセアニアの言語を研究している菊澤律子さん(民博)の全面的な協力を得て、ようやく完成一步手前まできました。

一九七〇年代の時点で、星のコンパスと海流のうねり、貿易風を頼りに航海する伝統的な航海術を伝えているのは、このサタワル島とその東のブルワット島(チューク州)の二つしかなかったのです。なかでもサタワル島の航海者は、復元した

―外庄による自然破壊と自立を求める住民運動の代表例の一つでしょうか。島嶼社会のあり方もいろいろ違うようで、それぞれの現状と変化を追いかけていられるんですね。

サタワル島でも最近では人口が増えて、ヤップやグアム、ハワイに三〇〇人が移住するなど、社会の変容はやはりどんどん進みます。この動きをどうとらえ、島社会にどう貢献できるかも、これからの仕事だと思っています。

―国境を越えた動きを追うなかで、神戸大学に移られたんですね。

神戸大学には、誕生してまもない国際文化学部をキラキラ光る学部にしたいと、一九九三年に異動しました。

教育改革に取り組んだ神戸大学時代

まず取り組んだのが交換留学。交流委員長として外国の各大学と協定をむすび、ゼロだった留学先の授業を受けながら、現地の言葉も修得できる環境の大学を対象に、英独仏語圏のほか、ルーマニア、ポーランド、ベトナムなどの大学とも協定しています。こうした制度によって、国際的な舞台で活動できる人材を育成しています。JICA(国際協力機構)や外務省、海外進出している会社に就職する人も多くなっています。

外国語教育にも取り組んで、教室の外でも語学を学ぶ機会をつくらうと、国際コミュニケーションセンターをもうけました。読み書きから、聞く話すの両方ができるように、統合的かつシステムテックな外国語教育ができる場です。学びたい語

ポリネシアの双胴帆走カヌーでハワイ諸島とタヒチ島間の実験航海のキャプテンとして招かれ、これを成功させました。ハワイの人たちはこの実験航海によって自分たちの祖先がタヒチからきたことを確認し、今日では、これに新しい知恵と技術を盛り込んだ独自の航海術が若者に伝えられています。伝統的な航海術がハワイアン・アイデンティティと文化復興に貢献しているんですね。サタワル島の人たちはよくぞオセアニアの伝統を残してくれたものだと思います。

変容するオセアニアをみつめるなかで

九〇年代には、ポリネシアのトンガ王国に数年間通いました。ここは一九七〇年にイギリスから独立したものの経済的自立ができていない状態でした。結局、彼らはハワイやニュージールランドに移住して、生活水準を向上させるとともに、お金



久保正敏編集長(左)と須藤健一館長

学をきちんと修得できるようにし、意欲のある学生は海外に出られる仕組みを整えました。

―日本文化人類学会長、日本オセアニア学会長などとしても活動されていますね。

文化人類学は、停滞的な状況にさしかかっています。これは学問的性格によるものですが、学会としてやらねばならないこともある。大学生や高校生に文化人類学という名前を知ってもらう、文化人類学に関心をもってもらうことです。そこで、文化人類学とはなにかを理解してもらう場をもうけました。第一回を東京と神戸で、第二回は広島で開催しました。ただの講演ではおもしろくないだろうと、生活用具などを見せながらモノの意味と人間との関係など、二、三人の講師に文化人類学をおもしろく話してもらいました。ただ、残念なことには高校生はあまりこなかった。集まったのは高校の先生や大学生、社会人の方々でした。異文化理解の教科を初等中等学校に新設するまでには言わずとも、教育のコンテンツを充実させ

を本国へ送る方法を選びました。といっても、移住する人の数が半端端ではない。国民人口より多い。そのかわり本国にいる親たちは左うちわ。いい家に住んで、車もある。移住した子どもたちが、そのお金や物を送ってくれるからです。

―おもしろいですね、ある意味、国境がバーチャルに拡大していますね。

国境を越えた家族。彼らは移住した先でも、フォーマルな場ではトンガの伝統的な服装を必ず着けます。トンガの財産であるタバ(樹皮布)やゴザなども移住先に持参し、移住先の社会でもそれが交換財になっています。そうした移住は一九七〇年にははじまっていますから、まさにグローバル時代の先兵たちです。

二〇〇〇年代に入ると、メラネシアのソロモン諸島で調査をはじめました。かつては豊かな原生林の茂る島でした。ところが、自然保護の高まりとともに、マレーシア政府やインドネシア政府がボルネオ島での日本向けの森林伐採を禁止すると、そこから業者がどっとソロモン諸島に流れてきた。ソロモンの人たちは裏山の木が金になるというので飛びついたんです。ところが、山に木がなくなると雨が降ると土砂が川に流れ、珊瑚礁は死に魚もいなくなる、井戸水は飲めなくなる。

これではいけないと、NGOや教会の人たちが助言に入りました。「お金が欲しいなら、子どもたちに教育を受けさせたいなら、自分たちで一年に数本の木を切って角材にして売ればよい」と。運動はある程度の拡がりを見せています。しかし、民族紛争が起こったりして、けっして順調とはいえませんが、「山は国のものではない、共有の財産としてみんなで守るんだ」という意識がしだいに定着しつつあります。

てほしいという要望書を日本地理学会などと一緒に文部科学省に出しています。

民博が

民博であるための条件

日本文化人類学会では『文化人類学事典』(丸善)を編纂して刊行しました。高校生には少し難しいかもしれませんが、ストーリーで文化人類学の考え方を伝えるものにしていきますから、大学生や高校の先生には学問のおもしろさを知ってもらえるはずですよ。

民博やその他の学会と協定をむすび、学会賞を設けて優秀な若手の養成もしています。文化人類学会の会員は約二〇〇〇人、民俗学や文明学、芸術学など、関連する学会をふくめるとそれらの会員は一人くらい。そういう研究者コミュニティの核に民博がなるよう努めないといけない。そのうえで国際学会との関わりも強める。

国際人類民族科学連合という国際的な組織はありますが、近年あまり活動していません。ですので二〇〇四年に小泉潤二会員(大阪大学)が中心になって人類学会世界協議会を結成しました。いまでは二八、九か国の主要な人類学会が加入しています。国際的な裾野を拡げることがも欠かせないと考えています。

―民博がめざすべき方向をどうお考えですか。

開館三〇周年記念の一連の事業には、「民博には質的にも量的にも、これだけのものをこなす知的パワーがあるんだ」と感激しました。人間だと三〇年もすれば一代が終わる。組織も三〇年もすれば劣化するといえます。しかし、民博は違う。第二世代が育ち、その若い世代を中心に新しい息



吹が民博に芽生える可能性があると感じました。とはいえ、そういう力をどの方向にむければよいのかと考えると、目玉がない。民博は共同利用機関法人、共同研究の拠点ですよ。四〇ほどの共同研究を進めているし、共同研究と研究スタッフの公募制も採り入れて改革をおこなっていることは評価できます。しかし、「これこそが民博の研究だ」という姿は明らかに見えてこない。アカデミックな分野で、国際的にも認知されるような研究を一層推進する必要がある。

民博は欧文刊行誌の『SE』を出版していて、外国の研究機関や人類学関係者はこれをとおり「日本に民博あり」と、民博の研究の質の高さを評価していた。かつて谷口国際シンポジウムは、一〇年にわたり海外の研究者を招いて一週間のあいだ合宿のようにして特定のテーマについての議論・交流していましたね。あのような国際研究集会を実施したいものです。民博は、今年度からあらたな機関研究をスタートさせますから、これをどう伸ばすかです。

海外の研究機関との学術交流の促進も課題です。スタッフが往來して国際シンポジウムを共同で組織するような仕組みを用意したい。台湾や韓国との博物館間協定やフランス等との研究所間交流もしようか。

今、常設展示のリニューアルを進めています。展示が三〇年間そのままでは人はきてくれません。三月二日から特別展「千家十職×みんぱく——茶の湯のものづくりと世界のわざ」を開催しています。千家をはじめ、十職の方々にご尽力いただきました。利休は桂川の漁師が腰につけていたビクに美を見いだし花入れにしたそうで、その「桂籠花入」は名品として今に伝わっています。同じように、民博が収蔵する世界の生活用具のなかから新しい感覚の美を発見していただきました。驚嘆に値する新しいかたちの展覧会になりました。入館者を増大させる契機となるのではないかと、私は期待しています。

多くの人が気軽に海外に出かける時代です。しかし、現地で見えてきたモノには、もっと奥深いなにかがあることを知っていただきたいのです。開館三〇周年記念のキャッチコピーのようにモノをとおして「知の奥へ」誘いたいのです。その手段の一つとしてのモノをどう活用するか。どう仕掛けて、どう展開するか、これも私の課題だと思っています。

「モノから入って「知の奥へ」到達する仕組みの開発ですね。」



さらに進めてもらいたい。館員の業績や成果、出版物が国際的に認知され、国際的なスタンダードにあることを確認できる組織にしたいと思います。

社会に還元する 実践人類学を展開したい

民博の研究の基本スタンスは、フィールドワークに基づく研究だと思っています。自己満足の学問に留まることなく、研究成果を社会に還元する実践人類学を進めたいと思います。日本の海外援助の施策においても、人類学者がそなえている国際的なモラルやセンス、あるいは人類学の立場からの援助評価などが、実践の場で活用されるようであってほしい。海外援助には、実施の可否の評価を含めて指針が必要です。人の暮らしに関わる部分の援助のあり方については、それぞれの研究者に発言したいことがあるはずですよ。



トンガ王国は皇民教育が盛んで、国王戴冠式の記念パレードには高校生たちもかり出された(2008年)



王宮近くの公園の入り口に掲げられたパネルには「王の世が永遠に続きますように」と書かれていた



ミクロネシア連邦ヤップ島の古老から話を聞く(1997年)

共同利用機関としての民博は、資料をどのように活用すべきかと考えますか。

内外の人文社会科学系の研究者などで、民博の資料を使って研究したいという人がいれば、どんどん使ってもらいたく、そういうスタンスで貢献すべきだと思っています。研究者であれば閲覧できる制度がありますが、もっと簡単に利用できる仕組みがあつてよいのではないのでしょうか。

民博の資料を、しっかりと保存するものと、積極的に利用してもらつたものとに分けることはできないでしょうか。民博の持ち味のたくさんある映像資料の活用策もあるはずですね。

それは共同利用機関としての責任ですね。現在、各大学の付属研究機関が大学共同利用機関に改組する動きがあります。共同利用機関の先輩である民博は共同研究だけでなく、なにをすべきかが問われることとなりますね。

博物館としての民博は、どのようにあるべきで

そう、入口の一つとしてのモノ。「みんぱく」は貸し出し希望も多いですから、民博の館員も地域社会に出かけて子どもたちと話す機会ができればいい。大学も高校に出かけて「出前授業」をおこない、一般向けに公開講座をする時代です。民博は「みんぱくゼミナール」を月一回館内で開催していますが、民博だつて外に出ることが必要です。自治体の公開講座があればどんどん出かければよい。私のアイデアの段階ですが、民博の館員五人が一組になって「五週連続講座」のようなイベントを増やしてみたらどうかと……。民博に関心をよせる人が増えるし、社会的貢献としてもやるべきです。

民博館長として、民博と文化人類学の今後の抱負をお願いします。

あるアメリカの人類学者は、「一九世紀後半ま

での地球上には数千の文化があつたが、現在は二〇〇しかない、文化はほとんど失われている」と指摘しています。グローバル化は世界に大きな影響を与えますが、多くの社会では外からの新しい文化や制度をしたたかにローカライズしてゆきます。こうした現代社会の支配的な思想や文化要素にたいして世界各地の社会や文化がどのように対応しあつて、現地の人びとがそれを自分たちの伝統や価値観とどのように折りあいをつけているかを語るこのことができるのは、そこにじっくり住み込んで、現地の人と深い信頼関係を築いてきた人類学者たちです。私たちは、そういう状況を適確に把握して正確に記録に残す、それが大事なんじゃないでしょうか。現地の人びとの営みと人類学者のこの姿勢を続けるかぎり、文化の多様性は失われたいと信じています。

国立民族学博物館の 民族学研究アーカイブズ

民博は、文献図書雑誌、標本資料、映像音響資料の三種に分けて資料の収集と整備を進めてきたが、そのほかにも、さまざまなアーカイブズ資料を収蔵している。

一般に「アーカイブズ」とは、人間の諸活動で生成された記録のうち、将来にわたって保存する歴史的・文化的価値の高い記録史料を指す。それを保存利用する施設、日本では公文書館や史料館と呼ばれる施設もまた、アーカイブズと呼ばれる。

学術調査記録と 個人コレクションに特徴

民博のアーカイブズ資料は、公文書や史料とは少し性格が異なる。おもに民族学の研究史を物語る資料であることに加えて、紙媒体の資料だけでなく標本や映像音響も含む多様な資料から成るからだ。具体的に見ると、民博のアーカイブズ資料は、次の二つに大別できる。

一、民博設立時に移管された日本民

族学会などに由来する資料類や、戦後盛んにおこなわれた学術調査隊や科学研究費補助金による調査研究の過程で収集・生成された非図書資料、写真、映像、音声、メモ、フィルム、ドノートなど。

二、研究者の研究室や書斎にあったものが民博に寄贈され個人名の冠されたコレクションとして収蔵されているもの。



2階にあるアーカイブズ収蔵室。紙資料は、中性紙製の文書保管箱に収めて収納されている

前者は、戦後日本における民族学研究史を知るうえで貴重なが、所有権や著作権の帰属が不明なまま民博に収蔵されたものも多い。後者には、論文・著書・展示など研究成果発表の基となる資料類や、参考資料のコピー類など研究活動に関わるもの他に、私信など個人史に関わる資料類もある。これらのいずれにも、個人情報、プライバシーに関わる文書

が含まれている。つまり、民博のアーカイブズには、さまざまな権利処理なしには安易に公開できない資料が多いのである。

民博ならではの原則と展開

じつは、民博創設当初から「民族学史料」整備の重要性は認識されていた。しかし、前述のような諸問題に対応する整理法・体制が整備されていなかったため、公開できない状態が続いていた。ところが、二〇〇四年度からの法人化は、共同利用や社会還元をより進めることを求めるものであった。そこで、これを機会に、「民族学研究アーカイブズ」と命名して整備と公開が始められることになったのである。

先述したように、民博のアーカイブズは、紙媒体資料、映像・音響・電子媒体資料、標本資料といった多様な媒体から成る。そのため、媒体ごとに、最適な保管場所・利用場所を確保する一方で、仮想的には個人

名やコレクション名を付けて一体として管理することを基本原則とした。これに沿って、既存資料や新規受け入れ資料に対して、経緯を知る関係者への聞き取り、知的財産権や所有権の処理、資料目録の作成、などがまず進められる。そして処理の終わったものから、順次、資料リストがウェブで公開される。このリストを見た研究者がおこなった資料研究の成果が民博に還元されれば、より詳細な資料情報が徐々に蓄積されることになり、アーカイブズの整備が進んでいく。われわれが期待しているのはこれである。

ただきたいが、民博にあるのは民族学関連分野研究者が残した資料に限らない。例えば、故・三代目桂米之助氏の旧蔵資料がある。氏が現・桂米朝の兄弟弟子だった縁で民博に寄贈されたものだが、そのなかには、日露戦争時の新聞号外などが含まれ、メディア史や世相史の研究者にとっても貴重なものとなりそうだ。

保存と利用のバランス、 文化的な知的財産

保存と利用のバランス、文化的な知的財産。もつとも、アーカイブズを整備するうえで、保存の問題や、文化に依存した知的財産権の問題などが、依然大きな課題として残されている。いかにして資料の保存と活用のバラ

ンスを図るかは、どの資料館でも頭を悩ます点だ。共同利用機関である民博は活用を軸足を置くことを原則とするが、保存にも目配りが当然必要である。なかでも、ある種のフィルムには、劣化とともに酢酸臭を発生する「ヴィネガー・シンドローム」と呼ばれる現象があらわれ、劣化対策が焦眉の急だ。複製権をもつフィルムについてはデジタル複製、それ以外については専用施設の用意などの対策が考えられるものの、ともに莫大な経費とスタッフ確保が悩みである。これは内外のフィルム収蔵施設にも共通する課題だ。

知的財産権の問題も避けては通れない。諸文化には固有の知的財産

が含まれている。つまり、民博のアーカイブズには、さまざまな権利処理なしには安易に公開できない資料が多いのである。



日露戦争当時に大阪で発刊された新聞号外類は、三代目桂米之助氏が旧蔵していた資料



3階にあるオリジナル・ネガ収蔵庫は、フィルム類の劣化を抑えるために12℃、相対湿度40%が維持されている

久保正敏

くぼ まさとし
民博文化資源研究センター
京都大学大学院工学研究科修士、工学博士。民族学に情報学を取り込む民族情報学を提唱。オーストラリア先住民コミュニティ成立史の研究などのほかに、時空間統合アーカイブズの重要性を提唱している。



セントキッツ博物館／セントクリストファー・ネーヴィス

自らの誇りを 取り戻す博物館



右奥の博物館は町の中心部の一面をしめる

2006年2月から約2年間、カリブ海に浮かぶ島国に滞在した。現地の人びとが設立し自らが運営する博物館を、収集・展示・教育などの博物館事業や職員養成などで支援するためである

セントクリストファー・ネーヴィスは、一年中すがすがしい熱気を感じる美しい海に囲まれた気持ちのいい島国である。二つの島で一つの国をなし、面積は二つの島をあわせても淡路島の半分未満に満たない。セントクリストファー島(セントキッツ島)のほうがネーヴィス島よりやや大きいが、それでも車で一時間強もあれば一周できてしまう。人口は約四万。阪神甲子園球場の最大収容人数が約四万七〇〇〇人だから、それより少ない。

セントクリストファー島にいた先住民は、英仏の入植者によって一六二六年に大虐殺され、生き残った者は島から追われた。現在は、サトウキビ農園の労働者としてアフリカから連れてこられた奴隷の末裔たちが人口の大半を占める。一九八三年に英国から独立した。南・北・中央アメリカのなかで、面積が一番狭く、人口が一番少なく、そして一番新しい国家である。

歴史・文化・自然遺産の保存・活用を訴える

こんな小さな島国にも博物館は存在するものである。セントキッツ博物館

博物館は二〇〇二年開館で、職員は館長以下五名。島の歴史・文化・自然を紹介する小さな博物館である。セントクリストファー遺産協会という、歴史・文化・自然遺産の保存・活用の大切さをより多くの人びとに伝えるために一九八九年に設立された現地NGOが、国からこの博物館の運営を委託されている。収蔵資料は少なく、住民が「土を掘っていたら出てきた」と言って持ち込んだ先住民の石器や、近現代の生活用具などが中心である。

この地は毎年一月から翌年の四月が観光シーズンで、大型クルーズ船が頻繁に出入りする。博物館は町の中心部に位置するため、クルーズ船の欧米人観光客も多数立ち寄り。博物館にとって彼らが落としていくお金は貴重な収入源となる。しかし、この博物館は観光客が楽しむためだけに存在しているわけではない。

歴史・文化を創造する

近年、住民の自己の文化的アイデンティティの高揚に伴い、非西洋に所在し現地の人びとが運営する博物館も、住民自らが自文化を表象し再認識・再構築する場所として機能す

奴隷としてアフリカから連れてこられた先祖の足跡をたどり、仮面や彫刻などの美術工芸を中心とする展覧会であった。博物館は住民や行政とともに文化や歴史を再構築する中心的存在になってきている。

小さいながらも、自らの誇りを取り戻すためにさまざまな取り組みをおこなう博物館。住民たちが「自らの手で、自らの文化や歴史を、自らの土地において表象する」ことを目的とした、新しい形の博物館として注目したい。



資金調達のために博物館はパーティを主催する



五月女賢司
さおとめけんじ
民博 機関研究員
専門は博物館学。特に、博物館における展示や教育活動のあり方や地域における博物館のあり方について関心がある。セントクリストファー・ネーヴィスには、国連開発計画(UNDP)の下部組織である国連ボランティア計画の一員として赴任した。

表紙モノ語り

マルケサス諸島のタバ

樹皮布(タバ) (標本番号H0162578) 縦51×横125cm、
製作年代1980年

● 須藤健一

南太平洋のマルケサス諸島の銀行やホテルには、額に入った復興タバ(樹皮布)が誇らしげに飾られている。織物の技術をもたないポリネシアの人びとは、カジノキの内皮を打ちのばしてタバを衣服に、寝具に、そして交換財に使用してきた。

タバは、カジノキを指すタヒチ語の「タバ」がヨーロッパに紹介されて樹皮布を意味するようになった。現在、タバは、マルケサス人のアイデンティティとエスニシティを表象するうえで不可欠である。マルケサスは、刺青の島として西欧に知られていたが、キリスト教の布教とともにその慣習は廃棄



スティールドラムのハンズオン展示

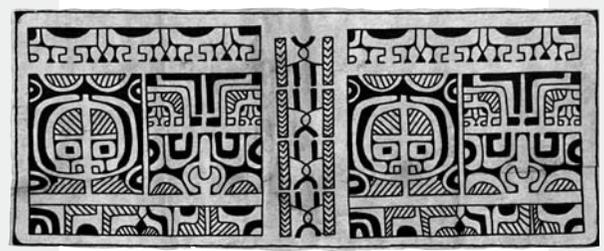
された。刺青とタバの図案には共通性がある。その図柄には、三角形や曲線、神話上の神々、創造神チキ、ニワトリ、ウミガメ、エイ、トカゲなどの生き物、人間の瞳や性器、雲などが抽象的に描かれる。表紙のタバの最上段の図は「雄鳥の歩き方をする男」といわれる。ポリネシアの刺青研究の第一人者桑原牧子(金城学院大学)さんによると、中央縦の図はウミガメ、左よりの二重円で囲まれた図柄は巻貝、その右下には人面がそれぞれ描かれているという。

タバの製作技術は、ハワイやタヒチなどからは消えてしまったが、マルケサスには一九二〇年代まで

残っていた。六〇年代になって島に寄港するヨット旅行者のみやげ物としてタバが再興された。その後ポリネシアン・ルネッサンスの動きにそって刺青とタバに代表される固有の文化が復興した。

一方、トンガ王国では古来から女性たちがタバをつくってきた。今でも幅三メートル、全長二〇メートル余の「完全タバ」は、結婚式の衣装、葬式の贈りもの、踊りの盛装、民族芸術品として国内外での価値は高い。

この収蔵品のように、刺青のデザインを模したものは一八七〇年ごろまではさかんに使用されていたとの記録がある。



暮らしを彩る暦

暦の機能と文化

先日、人間文化研究機構の連携研究「文化の往還」の研究会で、モンゴル国のカレンダー文化の話や、モンゴルに恵まれた。モンゴルでは、古くから日月星辰の運行を計算した精緻な暦が作られ、日々の吉凶や運勢が占われてきた。

●方違えをするモンゴルの人たち
研究会では、モンゴル暦研究の第一人者であるモンゴル国立大学元教授のテルビシ氏をお迎えし、モンゴル暦にはインド・チベット系の暦と中国系の暦の両方の系統があることや、モンゴルの人びとの日常生活にモンゴル暦が深く根をおろしていることを興味深く拝聴した。

モンゴルでは、自分の生年に応じた毎日の運勢がとても大切で、新聞にもモンゴル暦にしたがった運勢が毎日掲載されるという。方角もまた重要で、ある場所に出かけるとき、方角がその日の自分にとって凶であれば、日本で言うところの方違えをおこなう。

●外出時刻と方角の吉凶を占う台湾
こうした話を聞きながら、筆者の調査地である台湾でも日々の吉凶を気にする習慣が根強く残っていることを思いだした。

涙の文化というテーマで原稿の執筆を頼まれ、台湾の風景を涙という切口で描こうとし、思いついたものの一つが泣き女であった。朝鮮半島の習俗で「泣き女」という職業を聞いたことがある人は少なくないだろう。葬儀に参列して泣くことをなりわいにする女性である。じつは、この泣き女が派手に泣く光景は、朝鮮半島のみならず、中国や日本でもかつてしばしばみられた葬儀の一コマであった。

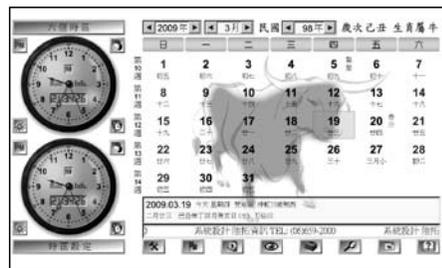
現在の台湾では、地方に行けば時折出くわすこともあるが、台北のような都市ではほとんど見かけないことではないという。それでも、方に一つという思いで、台北の中心部にある総合葬儀場に出かけてみると、二十代の友人に相談した。すると、「ちょっと待って」と携帯電話をとりだし、なにやら操作をはじめた。しばらくして、「今日も明日も、第一総台葬儀場の方角は大丈夫ですよ。でも、できれば午後の方がいいです」。私の生年月日から、葬儀場に行く時刻や方角が適切か否かを調べてくれたのである。

●世俗的価値観を反映する
聞くところによると、携帯電話

でこの種のサービスを使うのはそれほどめずらしいことではなく、方角や時間の吉凶は若い人もそれなりに気をつかうという。日本でも、結婚式に仏滅目を避けたり、友引の弔事は忌むというのはよくあることだが、日常の吉凶を携帯電話で調べる台湾の若い人の価値観には少し驚いてしまった。

暦にしても占いにしても、人びとの行動を一定の規則にしたがわせるという点では、権威的な性格を帯びていると言わざるをえない。

一方で、人びとの日常や世俗的な価値観に合わなくなった暦や占いは、時には修整され、時には他のものに置き換えられる。世界のあちこちに、土地にあわせた暦や占いが存在する所以がここにあるのだろう。



台湾でも暦や占いにまつわる多くのウェブサイトが開設されている

のばやしあつし
野林厚志

民博文化資源研究センター

専攻は人類学。台湾の原住民族の人びとがおこなってきた狩猟行動を民族考古学的にアプローチするなど、動物資源の利用に関わる研究をおこなっている。



ガザとピラミッド 古代文明への幻想と現代史

エジプトの首都カイロはアフリカ最大の都市で、かつてはダマスカスと並ぶメッカ巡礼キヤラバンの出発地。さぞかし交易と通商の要衝として繁栄の遺産がみられるに違いないと思っていたが、実際には貧困と軍人出身者による政権が支配する厳しい生活があった。

エジプトは第二次世界大戦後の植民地独立運動、そして中立同盟政策が華やかになりしころ脚光を浴びた。アラブ連盟を設立し、アラブ人の連帯を訴えたナセル大統領は、ユーゴのチトー、インドのネルー、ルーマニアのチャウシェスクと並んで第三世界のリーダーの一人であった。ナセル急死後、政権を継承したサダトは社会主義からの脱却を目指して強いリーダーシップを発揮し、一九七三年第四次中東戦争ではイスラエルに対して初めて軍事的勝利を得、さらにはイスラエルとの和平路線を導いた。だがムスリム同胞団による暗殺に倒れ、軍出身のムバラクが後を継ぎ現在にいたっている。

●古代文明と現代文明との狭間で
ピラミッドを意識してか、カイロはなにもかもが巨大なスケールである。空港から市内に向かうルートもただっぴろい空間が支配している。

市内中心部の道路幅もやたらひろく、横断するのは命懸けである。なにしろ、交通規則というものが機能していない。ドライバーも歩行者も信号無視が当たり前、交通整理とおぼしき警官はたくさんいるが気まぐれでさほど機能しているとも思えない。のんびりと道路をみているばかりである。たまりかねて宿の主人に不満をぶちまけると、彼は穏やかな口調でいう。

「システムというものは、部分的には変更できないものです」
つまり、数千台の自動車交通量で計算された都市が、四〇〇万台の自動車効率よく動かすのは土台むりなのだ。新しい都市を建設したほうがはやい。民主主義といふ環境問題といふ、現代社会におけるグローバル化がもたらす社会問題は、文化に根付いているという点で共通するかもしれない。文化にかかわる社会システムというものは、部分的に移植することはできないのだ。

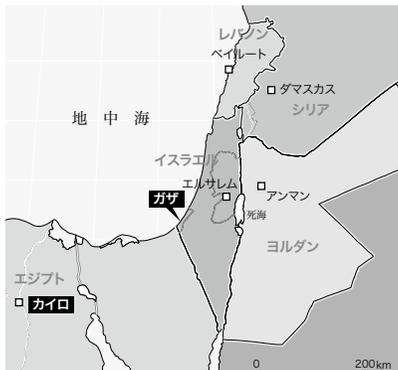
●国際関係をめぐる歪なシステム
私がエジプトを離れてから、イスラエルによるガザ侵攻が始まった。連日の爆撃に市民が殺戮されていく。私が主に研究するルーマニアでも、ユダヤ人のアウシュヴィッツへの連

行、虐殺があった。歴史を通して民族浄化の悲劇は枚挙にいとまがない。ユダヤ人は確かにヨーロッパ諸国でいくたびも虐殺の対象となってきた被害者である。それから逃れるためには国家が必要であるという主張は理にかなっている。しかし、虐殺に関与しなかったパレスチナの人々に代償を払わせるのは理不尽だし、民族の虐殺に関する歴史的記憶が新たな虐殺を正当化する特権を生み出すわけではない。

かつてアラブの連帯と正義を掲げてイスラエルと戦ったエジプトだが、もはやガザの人びとのためにイスラエルとの和平を危険にさらすことはないだろう。エジプトの政権は、民衆の貧困と不満を軍力で抑えている綱渡り状態であるからだ。軍事的敗北は現政権の崩壊をまねく。イスラエル建国から五〇年を超え、ヨーロッパにおける虐殺の歴史的経験のなかから暴力的に建設された国家は、民主主義を標榜するアメリカの援助と軍事力に支えられ、金融資本主義をめざすアラブ世界の適応と妥協のなかで存続している。これも誇るべき民主主義と資本主義のシステムの一部というものなのだろうか。



カイロの雑踏



しんめんみつひろ
新免光比呂
民博民族文化研究部

専攻は宗教学、東欧研究。とくにルーマニアにおける民族と宗教文化を中心に研究する。最近では、バルカン地域におけるトルコの文化的影響や宗教と商業のネットワークに関心があり、その一環として2009年1月にエジプトを訪れた。

多文化を	ささえる	人びと
------	------	-----

ことばに仕事をあたえる

多言語センターFACIL

阪神淡路大震災のあとに始まった多くの外国人支援活動にユニークな組織が加わった。多言語センターFACILは、ことばの翻訳・通訳サービスに適正価格をつけることで、外国人支援組織の運営基盤を固め、同時に移民のことばに資産的価値を創出する

しょうじひろし
庄司博史

民博 民族社会研究部

言語学・言語政策論。2004年に特別展「多
みんぞくニホン」を企画した。近年は移民言語
や多民族化の諸現象に関心をもちている。共
編著書に『多みんぞくニホン』(2004年)、『
事典 日本の多言語社会』(2005年)など。

一九九五年の阪神淡路大震災は、民間の外国人支援活動にとって大きな転換期となった。震災をきっかけに、情報不足にあった多くの外国人の存在が浮かび上がった。

日本人でさえとまどう混乱のなかで、なにが起ったのかも、どこに支援があるのかもわからぬまま、多くの外国人が不安の真つただなかにあった。これにいち早く救いの手を差し伸べようとする動きがはじまった。民間のボランティアの人たちであつた。震災の中心地神戸市でも、いくつもの善意が形となってあらわれた。

神戸市西部に位置する長田区周辺は、地震のダメージのもっとも大きい地区のひとつであつた。下町にあるカトリック鷹取教会(現・たかとり教会)周辺も多くの家屋が倒壊し燃え落ち、避難場所や情報を求める被災者であふれた。教会とかわりあつた周辺のベトナム人の多くも、

その中に含まれていた。多言語センターFACILの創設者吉富志津代さんは、たまたまそれまで参加していた教会でのボランティア活動が縁で被災した外国人とかわり、救援にのめりこんでいった一人である。

情報難民を生み出すことばの壁

震災後の復旧が進み、当面の生活環境が整うなか、外国人の抱える深刻な問題が明らかになった。彼らの多くは日常生活において社会にほとんど注目もされず、生活情報から切り離された人びとであつた。主な原因は不十分な日本語能力にあつた。日々の暮らしに扱われる彼らには、学生のように日本語学習に費やす時間や経済的余裕はあまりない。役所の提供する保健や医療サービス、子どもとの連絡のやりとりで不自由する人は少なくない。

FACILの設立は、それまでの外国人支援活動の空白を補うものであつた。

九〇年代に入り外国人の増加とともに、行政の広報や案内などの多言語化のニーズがたかまり、個人が申請書などさまざまな書類の翻訳を必要とする機会も多くなつた。しかし、ベトナム語、タガログ語など、日本でなじみの少ない言語を請けおえる翻訳・通訳者は皆無に近く、いたとしても法外な費用がかつた。やむをえず依頼した結果、間違いだらけの仕事がもどつたこともあつた。依頼者側にも問題があつた。営利目的でないという理由でタダ同然で依頼

できるという誤解は根強いものであつた。

移民言語がささえる コミュニティ・ビジネス

吉富さんは、このような需要をベースに、外国語能力を活用した翻訳・通訳サービスをたちあげ、それをコミュニティ・ビジネスとして育てようとした。外国人にとつても、日本社会から援助をうけるばかりではなく、社会参加しながら自立できるという自信につながりうる。外国人を支援する組織にとつても、経済基盤を確立できる可能性を示す機会でもあつた。それまで数々あつた支

震災後、各地でこうした外国人を支援する組織が生まれ、自治体にも多言語による行政サービスの動きが見えはじめた。鷹取救援基地と呼ばれたカトリック鷹取教会の敷地にも外国人を支援しようとする人びとがあつまり、多様な活動がなれば手探り状態で展開しつつあつた。多くの人のとつて、ボランティア活動自体はじめての経験であつたし、多言語ラジオ放送、多言語による医療相談や生活相談など、ほとんどの事業はかつて存在すらあまり知られていないものであつた。そのひとつに、吉富さんが一九九九年の創設以来かわつている多言語センターFACILがある。

移民とともに増える 移民言語の通訳・翻訳の需要

FACILの主な活動は、一口でいうと外国語の通訳や翻訳事業である。このようなサービスをおこなう援組織は、善意とはいえ、マネージメントを他からの援助に依存したために、現われては消えるという現象を繰り返してきた。

当初、それまでの活動でかわつた人びと七、八〇名に登録してもらいスタートした事業は、現在登録者約五〇〇名、対応可能な言語はネパール語やビルマ語など二八にのぼる。これらのネイティブ話者も少ない。ほそほそとはじめた事業ではあつたが実績は伸び、いまや民間の業者にも大いに意識される存在となつた。

設立から一〇年を経過し、多様な分野の仕事に対応するなかで翻訳を

業者はかねてからある。しかし出発点からFACILには大きな特徴があつた。それは外国人住民とともに多民族化する地域社会の需要に応え、ことばをこえた情報や意思の交換を促進すること、そしてこれを外国人支援の立場からおこなうことを設立の趣旨としたことである。

専業とするにまで育つた人もいる。それでも業者が扱わない個人の小口の依頼も比較的安価で受けてきた。今も約三分の一はそのような用件がしめる。吉富さんによれば、その路線はFACILの根幹でもあり、譲るつもりはない。利益追求を優先するNPOにはなりたくないという。

課題がないわけではない。いまや鷹取の外国人支援組織統合体のなかで財政基盤も強固になり、多くの活動を支える使命も果たしている。しかし外国人支援活動への社会や人びとの理解や援助はまだ十分ではない。吉富さんも、社会が直接そのような活動をささえることを理想とするが、それが実現するまでFACILの担う役割は重要だ。

FACILの活動がいかに画期的であつたか。まず、外国人の自立を支援するコミュニティ・ビジネスを目指していること、そしてマイナー言語の翻訳・通訳サービスに適正価格をつけたことである。これにより日本では話者にも軽視され日陰の存在であつた移民言語に、いくばくかの資産的価値を創出した。かれらの子どもたちに自信をあたえる可能性に注目すべきである。

多様性の保護をただ叫ぶより、仕事を留意するほうがよほど活力につながることは、移民のことばについてもいえるようだ。



被災地で暖をとる鷹取救援基地関係者



地域で暮らすうえで必要な情報を各国語で提供する事業にも協力してきた



震災後に開設した多言語ラジオ放送でスペイン語放送を担当する吉富志津代さん



2007年に改築される前のたかとり救援基地とたかとり教会

*詳細情報は <http://www.tcc117.org/facil/> をご覧ください

バイカル湖のご馳走

ロシア民謡でも知られるシベリアのバイカル湖。世界一の深さと貯水量を誇る神秘の湖は、淡水に棲むアザラシをはじめ、独特の生態系をもつ。完全に淡水化したサケ科の魚オムリもその一つだ



バイカル湖でのキャンプにはオムリが欠かせない〈オリホン島〉

二〇〇一年からロシア連邦ブリヤート共和国で、フィールドワークを実施している。この共和国はモンゴル国と接しており、その名称もモンゴル系のブリヤート人に由来する。しかし、現実には、共和国人口一〇〇万のうち約七割を東スラヴ系のロシア人が占めていて、約三割のブリヤート人を大きく引き離している。また草原(ステップ)のイメージが強いものの、じつは世界最大級の

バイカル湖にも接しており、沿岸地帯では漁業や製紙業も発達している。バイカル湖は断層の活動によって形成された「地溝湖」で、二五〇〇万年以上前に海から切り離されたと考えられている。琵琶湖の四七倍の面積を持つこの湖は一九九六年に世界遺産に登録され、多くの観光客をひきつけている。私も村落調査や観光で何度もバイカル湖を訪問し、その雄大さに魅せられてきた。

味わい方いろいろ

バイカル湖に行ったらぜひ味わってみたいのが、オムリである。オムリは淡水魚ではあるがサケ科なので、その風味はフナやコイとはまったくちがう。たっぷりとした脂のついたオムリは、あっさりとしたサンマ、サバといった味わいで、海の魚が好き日本人にはもちろん、淡水魚になれたロシア人にも、そして肉好きで知られるブリヤート人にも人気が高い。オムリは塩焼きにしたりパイに入れたりするが、わたしが好きなのは日本では珍しい燻製だ。ブリヤート人の知人は、塩漬がお気に入りだという。

あたる魚!?

オムリはいたみやすい



沿岸の村では、バイカル湖、修道院、オムリを村章のモチーフにしている〈ポソリスコエ村〉

沿岸地域では庭先に干された漁網をよく見かける〈オイムル村〉



魚なので、流通網が整備されていないシベリアでは、新鮮なまま遠くまで運ぶことが難しい。わたしがよく訪問する共和国南部の村も湖から離れているため、オムリはあまり一般的な食材ではないが、それでもたまたま生や塩漬のオムリを売りに来る者があるという。

ある年の冬、いつもお世話になっている家に行くと、夏に家族全員がオムリにあたり、隣村の病院に担ぎ込まれたと聞かされた。いろいろな機会に食べてきた魚であるが、じつはかなり危険なのである。去年再びその家に行くと、上の娘さんが結婚したという。お相手とは食中毒で入院した病院で出会ったのだそうだ。まさに「あたり」の魚であった。ちなみに、この家族はまたオムリを食べはじめたらしい。

生活を支える

漁業は昔から沿バイカル地方の大産業であり、沿岸地域に住む人びとの生活を支えてきた。その傾向はソ連崩壊後の生活難のなかでとくに強まっている。年金制度や就労シテムが危機的状況に陥ったとき、オムリをはじめとするバイカル湖の魚は人びとの貴重な栄養源になってきた。漁業組合の賃金は十分な額ではないものの、個人的に魚を売ればそれ相応の現金収入が得られる。人気の高いオムリならば、さらなる高収入を見込むことができる。

私はバイカル湖畔の村に滞在したとき、村全体が南部のステップ地帯と比べて豊かそうに驚いた。村で一人暮らしをするおばあさんは、「この村では魚が手に入りやすいから、

なんとか生きてこられた」と話してくれた。宿泊した家の主人も失業中ながら、早朝に一人ボートで湖に出てオムリを獲り、食卓に供してくれた。かつて訪問したステップ地帯の村の人が、「ウシを売ってもあまり儲けにならないし、自分が草を食べるわけにもいかない」と言っていたことが思い出された。魚は自分で育てる必要もなく、すぐに商品化できる有利な資源である。だからこそ乱獲も進んでいる。人びとも資源枯渇を心配しているが、密漁はたえない。湖の環境汚染も、オムリと住民の体を蝕んでいる。おいしいオムリがいつまでも獲れることを、現地の人びともわたしも願っている。

夕焼けのバイカル湖に漁船のシルエットが浮かび上がった〈オイムル村〉



オムリ (Omul)

Coregonus migratorius

ロシア連邦、シベリア地域南部のバイカル湖に生息するサケ科の淡水魚。北氷海に生息するものと区別して、バイカル・オムリともいう。成魚は普通35~40cm、重さ1kgほどになる。9~11月頃、バイカル湖に流れ込む川を遡上して産卵し、再び湖に戻る。19世紀から乱獲によって生息数が減少し、絶滅の危機に瀕した1960~70年代には数年間漁獲が禁止されていた。(写真・朝獲りオムリ)



伊賀上菜穂
いがうえなほ
中央大学総合政策学部准教授

専門は民族学(文化人類学)、ロシア史。ロシア連邦、とくにシベリアのブリヤート共和国を中心に、ロシア人とブリヤート人の民族間関係や、ロシア正教の一派である古儀式派の現状について調査している。

歳時 世相篇 13

沖縄本島では、この日を「浜下り」と呼ぶ。そのむかし、島の娘が、美しい青年と相思相愛の仲になった。あるとき娘は、青年の正体が蛇であると知り、母親に相談したところ、海水につかるよう指示された。娘は、蛇の子を流産した。それ以来、三月三日に海につかれば、一年のあいだに身についた不浄が海水に流れると信じられているという。

奄美大島では、別の説明を聞いた。この日に海につからないと、足の先が三つに割れてカラスになるという。『龍郷町誌 民俗編』（一九八八年）によれば、この日には、三角形の餅を食べて潮干狩りをする習わしがあった。ある話者は、三角形の餅が女性の象徴であると言ひ、別の話者は、この餅を不浄餅と呼んでいる。沖縄でも奄美地方でも、この日の行事は、女性の不浄とかかわっている

旧暦三月三日 海に願う無病息災

旧暦三月三日は新暦では四月にあたることが多い。南西諸島の人たちは古くからこの日に海に親しんできた。奄美大島では近年、この日に海開きの神事が開かれるようになり、いつしか伝統の習わしまでも復活することになった



いいたく
飯田卓
民博文化資源研究センター
漁撈技術、漁撈における慣行と規範、漁家経済の変化などを視点に北海道、八重山諸島、マダガスカルなどの漁村を訪れ、人間の営みと自然とのかかわりについて研究する。

しかるべき調理を
ほどこして食卓にの
ぼるといふ。

磯場には、波の荒い場
所や岩の割れ目、潮だまり

宮古島

石垣島
西表島

ようである。ただし、奄美大島北部では、「浜下り」は旧暦五月の虫払いを指している。旧暦三月三日は、たんに「三月三日」と呼ばれている。

潮干狩りに最適な三月三日

沖縄でもよい、奄美でもよい。旧暦三月三日の前後の干潮時に、海へ

をしている。アラスジケマンやリュウキュウハマグリといった二枚貝を、熊手や移植などで掘りながら探すのである。これらの貝類は、比較的小さな区域に高密度で生息しているから、腰を落ち着けておしゃべりしながら捕るのは都合がよい。近年では、車で大勢の人たちが市街地から干潟までやってきて、にぎやかに潮干狩りをおこなうようになって

海に出ている人に話を聞くと、一年のうちでこの日（旧暦三月三日）だけしか海に出ないという人もある。しかし多くの人は、この時季になると、三月三日にかぎらず頻繁に海に出るようだ。じつは、このことは、海洋物理学的にも理にかなっている。というのも、この季節は、一年のうちでもっとも潮が引く時期なのである。同じように潮の引きが大きい時期は秋にもあるが、昼よりも夜の



奄美大島のホテルでおこなわれた初節句行事

潮位が低い。昼間の明るさで海を楽しむには、旧暦三月三日の前後が最適なのである。

共同の行事として復活

このようにさかんな潮干狩りであるが、三月三日を特別な日としてとらえる感覚は、一般に薄らいでいるように思える。奄美大島の龍郷町で、よもぎ餅を御馳走になりながら、次のような話を聞いた。

「むかしは旧暦三月三日になると、このよもぎ餅をもって、潮干狩りに行きました。とくに、初節句を迎える娘がいる家では、その子を水につからせて、その後の成長を祈ります。潮干狩りが終わると、女の子の初節句を祝うために大勢の知人が集まり、両親がもてなしました。今は、もうやらんですね。」

もちろん、海に出て何かを捕るといふことは、あいかわらずおこなわれている。しかし、海好きな人が頻繁に海に出るのに対して、関心のない人たちは、むしろ海から遠のいている。海とのかかわりが個人化し、地域ぐるみで海とかかわることが少なくなつたといえるかもしれない。ところが近年、個人としてでなく集まった人たちがそろって三月三日を楽しむ動きが出はじめている。奄美大島では、観光物産協会や奄美市

観光課などが協力して、旧暦三月三日に海開きの神事をおこなってきた。それだけなら、観光関係者による宣伝活動に終わるところだが、近年、これに参加する市民が増えているのである。

二〇〇八年の海開きを、わたしは、奄美空港に近い観光ホテルで迎えた。そこには、神事の列席者のほか、大勢の親子連れが早くから集まっていた。初節句を迎える女の子たちを海に連れていき、海水に足をつけて成長を祈るというのである。ただし、海まで下りるのは、神事が終わって海開きが宣言されてからである。それを待つあいだ、若い母親たちは、粘土の皿に子どもの手形や足形をとっていた。観光ホテルが皿を焼きあげて、記念品として子どもたちの親に送付してくれるのである。

つまり、観光ホテルのアイデアにより、子どもたちの成長を願う行事として三月三日が見直されつつあるのである。観光ホテルは、海開きを盛りあげたかっただけだろうか。しかし、そのおかげで、忘れられようとしていた旧暦三月三日の民間行事が脚光を浴びてきている。娘に連れられて孫の初節句に居合わせたある女性は、次のように言っていた。

「今の人たちは偉いね。わたしらの若い頃には、こんなふうにしてあげられなかったけどね。」

土の中まで変えられない

急激な経済発展が貧富の格差と深刻な社会のひずみを生んでいる現代中国。フィールドワークでは、そうした劇的な変化のなかに生きる人びとに出会う一方で、また異なった中国社会の側面も見えてくる。



人びとでにぎわう広州の街並み

「中国が急激なスピードで発展している」ということは、ここで改めて繰り返すまでもなく、連日ニュースや新聞などでも取り上げられ、すでに多くの人の知るところであろう。また最近では、いちじるしい経済発展のひずみとして生じた格差が深刻な社会問題となっていることを見聞きする機会も少なくないように思う。いずれにしても、中国は劇的な変化のただ中にあるというのが、さまざまな報道や、あるいはそれをもとに形づくられる、われわれの現代中国観の根底をなしているのは間違いないであろう。

たしかにフィールドにおいても、そうした変化を実感させられることが多い。二〇〇一年から調査をおこなっている広東省の広州市は、すでに一九八〇年代からめざましい発展を遂げてきた沿岸部の大都市であるが、さらにここ数年では、近郊の農村部においても地下鉄や高層マンション

ションが建設されたり、あるいは人びとの収入が倍近くに上昇したりと、まさに変化はとどまることがない。また、そうした豊かさに引きつけられて内陸部からやってきた出稼ぎ移民たちは、都市中心部だけでなく、農村部の村々までに至り、その数が村の定住人口を上回るようになっていくケースも珍しくはない。こうした状況に身を置いていると、たしかに「変化」という言葉が、現代中国の、少なくともその顕著な特質を的確に表現しているように感じられる。

変わりゆく中国のなかの変わらない日常

しかし、個々の人びとの生活レベルに目を向けてみると、それらとはまた異なった現代中国の側面が見えてくる。例えば、いま農村部でもスーパーマーケットが急速に増えつつあるが、私がいつもフィールドでお世話になっている人びとは、毎日のよ

うに市場へ出向き、つい先ほどまで生きていた動物の肉や魚、あるいは早朝に運び込まれてきたばかりの野菜などを買い求めている。日々の食卓には、洋食などはおろか、辛味をきかせたものや揚げたものなど、北部や西部ではポピュラーな料理が並ぶことさえもまずなく、人びとの多くは来る日も来る日も、慣れ親しんだ、あつさりとした味付けの広東料理を食べている。これは高度経済成長期に食生活の欧米化が一気に進んだ日本のケースとは大きく異なっているように。

フィールドでの経験と一般化のはざままで

こうした現地の日常レベルの実情は、短期間の滞在や通常の報道からつかみ取ることはなかなか困難で、フィールドに長期間住み込み、人びとと信頼関係を築きながらじっくりと進めてゆく人類学的な調査手法なければこそすくい上げることができる

ものだろう。しかし他方で、そうしてフィールドに密着して集めた詳細で具体的な民族誌データには、ともすれば、その村のその人たちの個別的な事例に過ぎないのではないかと、という問いかけが常につきまとう。人類学者どうしの場ではさすがにそういうことは少ないが、他分野の研究者の前で発表すると、必ずと言っていいほど、「調査地の詳しい事情は分かりませんが、それはどれくらい一般化して言うことができますか？」とたずねられる。たとえ自分はいくらフィールドワークで知り得た調査地の事例に立脚して話をしていても、好むと好まざるとにかかわらずそれは、「中国ではこうだ」というようなより普遍化された一般性を伴ってしまつてしまつて避けられない。

また、地域に密着した個別的な事例調査が人類学の大きな強みであるのは間違いないが、それをあまりにも極限まで押し進めてしまつと、例えばかつての親族研究のような通人類学的な理論的基盤に事欠く今日では、地域を越えた議論がしづらくなつてしまつという問題もある。畢竟、多様かつ個別的なものではないひとつひとつの事例からできる限りの一般性を導き出すにはどうすればよいのか。そうした大きな語りのもとではひとつくりに回収さ

かわぐち ゆきひろ
川口 幸大
民博 機関研究員
専門は文化人類学。中国、おもに広東省珠江デルタ地域における「伝統」の形成とその変遷を研究する。とくに、清朝末期から現代にかけての親族・社会組織と儀礼・祭祀に関心をもちている。

毎年の季節ごとに催される年中行事や、人生の節目におこなわれるさまざまな儀礼についても同様のことが言える。ちょうど四月は祖先祭祀をおこなう清明節の時期にあたり、みな親族どうしが集まって、供えものとお線香や爆竹などの祭祀用品を大量にたずさえ、ほぼ半日かけて祖先の墓に参る。政府は土地が無駄に使われているとして数年前に墓を一斉に取り壊したが、土の下が無事ならばそれでよいと、以前と変わらず祖先を祭祀している人も少なくない。そもそも葬送儀礼自体についても、迷信的な要素を廃し近代国家にふさわしいかたちを普及させようという政府の方針によって、土葬が禁止されて火葬が徹底されたが、そのほかの部分にはほとんど変わっていない。公式的には禁止されているにもかかわらず、人びとの多くは道教の道士を呼んで経をあげてもらい、火葬済みの骨を風水師が選定した場所に埋



一族の祖先墓に参る人びと



家屋内に設けられた祭壇

れてしまつて個々の人の営みをいかにしてくみとつてゆくべきなのか。フィールドでは常にそんなことを考えながら逡巡する日々である。



↑川魚を炒めたもの(左上)や、さっと熱湯にくぐらせただけのエビ(右上)など、広東の家庭では調理法がシンプルで、味付けもあっさりとした料理が一般的



←新鮮な野菜が売られる市場前の通り

編集後記

4月はリフレッシュの季節、民博は須藤健一新館長を迎えた。巻頭では、創設35年を迎えた民博の若芽に順調に育ってほしいという熱い思いを語っていただいた。常設展示場も、アフリカ展示と西アジア展示をリフレッシュした。次号以降の特集で見どころなどを紹介する。

お気づきのことと思うが、本誌も今号からデザインなどをリフレッシュした。それにともない、発行が遅れたことを、深くお詫びしたい。

考えてみれば、日本人は年度もリフレッシュする4月に特別な思い入れがある。時計の針がもう一度戻る感覚がある。でも実際には、時間は容赦なく進み、ものごとは変化していく。私も馬齢を重ねることになるのだが、だからこそ、こうした円環状の時間感覚は、人びとになにかしらの安心と希望をもたらすのだろう。時間を直線の矢と見るか円環と見るか、文化における時間観念は古くからのテーマだ。円環の源は、地球の回転ひいては宇宙の回転にあるわけで、その回転エネルギーを、人びとは心理面で受け取っていることになるのかもしれない。(久保正敏)

次号の予告

特集 常設展示 リニューアル (西アジア)

月刊みんぱく
2009年4月号

第33巻第4号通巻第379号 2009年4月10日発行

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1
電話 06-6876-2151

発行人 西尾哲夫
編集委員 久保正敏(編集長) 佐々木史郎 庄司博史
中牧弘允 三尾稔 山中由里子
協力 財団法人千里文化財団
制作 京都通信社
印刷 市蔵図書

*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館企画連携係にお願いします。

*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

- 予定時間 14時30分から15時30分(予定)。
ただし、4月26日(日)は15時30分から16時30分(予定)。
- 特別展示場または常設展示場観覧料が必要です。
*都合により、予定を変更することもあります。

国立民族学博物館(みんぱく)の研究者が、来館された皆様の前に登場し、「研究の内容」、「調査地域・国の最新情報」、「展示資料にまつわる情報」についてお話します。質問もどんどんお寄せください。展示場でお待ちしています。

月の開催

4月5日(日)

話者: 須藤健一
(国立民族学博物館長)

話題: オセアニアの文化復興

場所: オセアニア展示



ミクロネシアのサタワル島の帆走カヌー

4月12日(日)

話者: 八杉佳穂 (民族文化研究部教授)

話題: 「千家十職×みんぱく」(特別展「千家十職×みんぱく」関連)

場所: 特別展「千家十職×みんぱく」会場

4月19日(日)

話者: 小林繁樹 (文化資源研究センター教授)

話題: 「手仕事を動詞で考える」(特別展「千家十職×みんぱく」関連)

場所: 特別展「千家十職×みんぱく」会場 2階

4月26日(日)★この日のみ15時30分から16時30分(予定)

話者: 長野泰彦 (民族文化研究部教授)

話題: 「ボン教に見るチベット宗教の基層」
(企画展「チベット ポン教の神がみ」関連)

場所: 企画展「チベット ポン教の神がみ」会場

4月29日(水・祝)

話者: 横山廣子 (民族社会研究部准教授)

話題: 「ナシ族画家のふるさと」(企画展「ナシ族画家が描く生活世界」関連)

場所: 企画展「ナシ族画家が描く生活世界」会場



交通案内

- 大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分
- 阪急茨木市駅・JR茨木駅・北大阪急行千里中央駅からバスで「日本庭園前」下車、徒歩約15分(茨木方面からは、もっとも近い「自然文化園・日本庭園中央」バス停で下車できるバスが1時間に1本程度あります。詳しくは阪急バスにお問い合わせください)。
- 自家用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」(有料)から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある民博専用通行口をお通りください。
- タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れてきます。

みんぱくホームページ

<http://www.minpaku.ac.jp/>

